



## 教皇様の聲

# 9

233号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1999

## 三位一体の神

## シリーズ5

○ 前回は述べたように、イエスはその言葉と働きを通して「ご自分の」御父との独特の関係を享受していました。イエスが人間に伝えたのは、「私と父とは一つである」(ヨハネ10・30)というきわめて深い親しさの結晶であったことをヨハネの福音は強調しています。「父のものはすべて私のものである。」(同16・15)互いによく知りあっていること(ヨハネ10・15参照)、互いに相手のうちにいること(ヨハネ14・10参照)、わざをなすこと(ヨハネ5・19、10・38参照)、そして「私のものはみなあなたのもの、あなたのものはみな私のものです」(ヨハネ17・10)と示されているように互いに持ち合っていることにおいて、御父と御子は互いに支え合っています。それは相互の交換とも言えるもので、イエスが地上の生活の間に御父に光栄を帰した後、死と復活という至高の秘義において御父から受けた光栄のうちに、完璧に表現されています。「父よ、時が来ました。あなたの子に光栄を与えたまえ、子があなたに光栄を帰するように。…私はこの世にあなたの光栄を現わしました。父よ、…私があなたのみもとで有していたその光栄をもって、いま私に光栄を現わしてください。」(ヨハネ17・1、4以下)

### キリスト信者の生活は三位一体とともに

このような御父との本質的一致は、イエスの働きに伴うだけでなく、その全存在の意味をはっきり示しています。「神の御子のご託身は、神が永遠の御父であり、御子は御父と一体であることを明らかにします。つまり、御父において、御父とともに、御子は唯一の同じ神であることを示すのです。」(カトリック教会のカテキズム 262番)福音史家ヨハネが強調するように、民の宗教指導者が反発したのはまさにこの神性の主張に対してでした。イエスが神を父と呼び、自分が神に等しい者であると言ったことが許せなかったのです。(ヨハネ5・18、10・33、19・7参照)

○ こうした存在と行動の一致によって、イエスは言葉と行ないで御父を示しました。「神を見た人は一人もいない。御父のふところにまします御独り子の神がこれを示された。」(ヨハネ1・18)共観福音書の記述が告げる通り、キリストは洗礼の時、「愛する」子であるとの宣言を受けました。(マルコ1・11、マタイ3・17、ルカ3・22)福音史家ヨハネは三位一体の根本に戻ってこのことに言及しています。つまり、永遠から御子を生じられた御父「とともに」あったみことば(ヨハネ1・1)の神秘的な現存について伝えているのです。

新約聖書の考察とそれに基づく神学は、御子から出発して、神の「父性」の秘義の深みを探り続けてきました。三位一体の生命の絶対原理は御父です。始まりのない御方、そこから神の生命が流れ出ます。三つのペルソナが一つであることは、唯一の神の本質を分かち合うことですが、それは御父を根源とする相互関係のダイナミズムにおいてです。「父が生み、子は生まれ、聖霊は発出する。」(第四ラテラン公会議 DS 804)

○ 使徒ヨハネは、私たちの理解をはるかに超える秘義に一つの鍵を与えてくれます。第一の手紙でこう宣言しています。「神は愛である。」(4・8)この啓示の頂点は、神はアガペであるということです。それはすなわち、キリストが特に十字架の死によって私たちに証明されたこと、無償の完全な自己贈与です。御父がこの世を無限に愛しておられることは、キリストの犠牲において示されました。(ヨハネ3・16ローマ5・8参照)無限に愛し、何も惜しまず尺度なく、ご自分をお与えになるのは神のわざです。神が愛であるからこそ、この世を自由に創造される以前から、神的生命そのものにおいて、御父でした。愛する御子を生み、交わりの相互のきずな・愛のペルソナである聖霊を御子とともに発するのは、愛すべき御父です。

これに基づき、キリスト信者は神の三つのペルソナの平等性を理解します。御子と聖霊は御父と等しいの

ですが、それは、あたかも三つの神であるかのような自律的な原理としてではなく御父から全ての神的生命を受けて、三者の関係の違いにおいてのみお互いが区別されるからです。(カトリック教会のカテキズム 254番参照)

偉大な秘義、愛の秘義、言い表わすことのできない秘義、その前で言葉は、畏敬と崇拜の沈黙に道を譲ります。神の秘義は私たちを夢中にさせ、賞賛させます。恩寵と、みことばの贖いの託身と、聖霊の賜物を通して三位一体の生命に参与するからです。「私を愛する者は私の言葉を守る。また父もその者を愛される。そして私たちはその人のところに行ってそこに住む。」(ヨハネ14・23)

○ 私たち信じる者にとって、御父と御子の相互一致は神の命の充満にあずかることを可能にする新しい生命の原理となります。「イエスが神のみ子であると宣言する者には神がその中にとどまれ、彼は神にとどまる。」(1ヨハネ4・15)このようにして三位一体の生命のダイナミズムは被造物に具現され、全てはキリストを通して、聖霊のうちに、御父へと向かいます。カトリック教会のカテキズムはそれを次のように強調しています。「キリスト信者の生活全体は、神のペルソナのそれぞれを分離することなく、それぞれペ

ルソナと交わることです。御父に栄光を帰す人は誰でも、聖霊のうちに、御子を通して栄光を帰すのです。」(259番)

### イエスの死を通して、御父は 新しい生命をくださった

御子は「多くの兄弟の長子」(ローマ8・29)となりました。イエス・キリストの死によって、御父は私たちを新たに生まれさせ、(1ペトロ1・3、ローマ8・32、エフェソ1・3参照)こうして私たちはイエスが用いたのと同じ言葉で、聖霊のうちに御父を「アッパ」と呼びます。(ローマ8・15、ガラツィア4・6)聖パウロはこの秘義をさらに説明しています。「私たちが光のうちに聖徒たちの遺産にあずかるに足る者とされた父…神は私たちをやみの権力から救い出し、愛する子の国に移された。」(コロサイ1・12～13)キリストと共に悪の力を征服し、悪に勝つ者の最期について黙示録は記しています。「勝つ者は私とともに王座に座らせよう。私が勝って父とともにその王座に座ったのと同様に。」(黙示録3・21)キリストは天国で御父と親しく交わるというすばらしい展望を私たちに約束してくださいました。(1999・3・10)

## 教会の模範であるマリアの祈り

(聖母マリアと教会 シリーズ24)

□ 教皇パウロ六世の著した『聖母崇敬についての勧告』は、祝された処女を教会の祈りの模範として示しています。この主張は、マリアを聖性への旅を続ける神の民の模範と仰ぐことの、論理的必然の結果と言えるでしょう。「この領域においてマリアが模範であり得るのはなぜかと言うと、それはマリアが教会によって、信仰と愛とキリストとの全き一致の最も秀でた模範とされているから、キリストに愛され主と深く結ばれた花嫁である教会が、キリストを呼び求めキリストによって永遠の御父に礼拝を捧げる時の教会の内的態度の範型がマリアだから、です。」(『聖母崇敬についての勧告』16番)

□ お告げの時のマリアは、神の計画への全面的な協力姿勢を見せました。それは全ての信者にとって、神のみことばを注意深く聞き、従順に従うための最高のお手本です。

「お言葉通り、この身に成りますように」(ルカ1・38)という天使への返答と、主のみ旨を余さず喜んで果たすという言葉によって、マリアはまさしくイエスの言う「幸いな者」となりました。「幸いなのは、神の言

葉を聞き、それを守る人だ。」(ルカ11・28)

マリアは救いの出来事の深い意味を理解していた

生涯を貫くこうした態度によって、祝された処女は主のみことばに聞き入るより高い道を指し示してくれます。神に耳を傾けることは、礼拝の本質であり、キリスト教の典礼の象徴となっています。マリアを見れば、礼拝とは、まず神のみことばを知るために耳を傾け、理解し、日々の生活で実行するに至ることであり、人間の思いや感情を表明するのはその次であるということがわかります。

□ 典礼祭儀はどれも、全人類のためのキリストの救いのみわざの秘義を記念するものであり、信者それぞれが、典礼の言葉と動作の中に再現され、現存する過越の秘義に参与することをねらいとしています。

マリアは、歴史の中で明らかになってゆき、贖い主の死と復活で頂点に達する救いのわざの証人でした。そして「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、

思い巡らしていた。](ルカ2・19)

マリアはそれぞれの出来事に立ち会ったのみならず、それらの深い意味を理解しようと勤め、それらの中で神秘的に成就されて行くものに、全身全霊を込めて忠実を保ちました。

このようにマリアは個人が神の秘義に参加する時の最もすぐれた模範となっています。マリアは、典礼で祝われる秘義を黙想し、救いの出来事に加わろうとする教会を導いて、信者たちにキリストとの親しく個人的なつながりを求めるよう励まし、万人の救いのために一人ひとりが自らの生命という賜物に協力のできるよう力づけます。

□ さらにマリアは、祈る教会の模範です。大天使ガブリエルがナザレトの家で挨拶をした時、マリアはおそらく祈りに専念していたのでしょう。そのような状況だったので、祝された処女は天使に答えて託身の秘義への寛大な同意を伝えることができたのでしょう。

芸術家たちはほぼ例外なく、お告げの場面のマリアを祈る姿で描き出しました。特にフラ・アンジェリコが有名です。その姿は、教会と一人ひとりの信者に礼拝の備えるべき雰囲気とはどのようなものかを教えています。

加えて言うなら、神の民にとって、マリアはあらゆる面で祈りの生活のお手本です。特に助けを求め、人生の様々な局面での支えを願って、神に立ち返るにはどうすればよいかを教えてください。

#### 霊的な犠牲を捧げるために

カナの婚礼での母親らしい取り成しと、高間で聖霊を待つ使徒たちの傍らでの祈りは、嘆願の祈りこそは救いの技を世に広げる手助けとして本質的なものであることを示唆しています。マリアの模範にしたがって、教会は大胆に願い、たゆまず取り成しを続け、そして何よりも聖霊の賜物を懇願すること(ルカ11・13参照)を学びます。

□ 祝された処女は、寛大に犠牲にあずかる教会の模範でもあります。

神殿でのイエスの奉献、そして特に十字架のもとで、マリアは余すところなく自分自身を捧げ、母親として御子の苦しみと試練にあずかりました。こうして、毎日の聖体祭儀において、「捧げる処女」(『聖母崇敬についての勧告』)マリアはキリスト信者が「神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げる」(1ペトロ2・5)よう励ましているのです。

(1997・9・10)

## 神への愛に成長して悪を克服しよう

(教皇様はローマの若者たちと会見し、現代生活における信仰の意味についての質問に答える)

### 第一の質問 (若者たちから)

「教皇さま、99年の世界若者の日のメッセージの中で、全教会と共に〈父である神に目を向け、イエスの驚くべき啓示への感謝と感嘆をもって耳を傾けよう、御父はあなたを愛しておられる!〉、また、〈御父の愛があなたを離れることはなく、あなたとの平和の約束も欠けることがない〉とおっしゃいましたが、本当にその通りだと思います。けれども時には、御父がどれほど私たちを愛しておられるのか、わかりにくくなることがあります。私たちと同じ若者が苦しみや死に直面する時、罪もない人々が自然災害に襲われる時、さらにもっとひどいのは、人が戦争の狂気を経験する時などです。実際、もうすぐ終わる今世紀は戦争と民族対立に彩られています。今、この時でさえ、戦火と敵意が私たちの近くの地域、元のユーゴスラビアで続いています。教皇さま、正しい人や罪もない人が苦しむ時も、仲間の若者たちが麻薬依存のような破滅的な状況に陥る時も、人間が憎しみや戦争で殺し合いをする

時にも、御父の愛が決してなくならないことをどうかお教えてください。」

親愛なる若者の皆さん。

バチカンへようこそ。ここパウロ6世ホールにお集まりの皆さん、そしてこの雨の中、外におられる皆さんを歓迎いたします。

皆さんが私に提示された大きな問題は、人間の心の奥深くに根ざしています。皆さんの代表の方が質問されたことは、ドストエフスキーの「大審問官」に出てくる強い異議申し立てを聞く思いがします。「罪もない子を死なせられた神を、どうして信じられるのか?」私たちは日々の生活の中で悪の問題を経験し、目の当たりにします。どんなに議論しても納得のゆく結論はすぐには出そうもありません。自分自身が病気や苦しみを経験したり、親しい誰かの死に出会うときにはなおさらです。

でも、私はこの問題が問いかけてくる難問を避ける

つもりはありません。まず皆さんに、ぎょっとするような質問を試みたいと思います。皆さんは憎しみや分裂、人の尊厳を踏みにじる様々なことや戦争に直面する時、御父の愛をどう理解すればよいのかと私にお尋ねになりました。今しがたもユーゴスラビアを流血に巻き込み、犠牲者と、これから起こるであろう事態がヨーロッパと全世界に与える影響への大なる懸念を引き起こしているあの紛争についての言及がありました。一刻も早く戦火がやみ、対話と外交が再開されることを心から願っています。全員の努力で、正当で長続きする平和がバルカン全土に訪れますように。

私としては、皆さんに申し上げたいのです。なぜ、神の愛はどこにあるのかといぶかるのですか。人間の罪から生じてくる責任には目を向けないのですか。なぜ神を責めるのですか、責任を問われるべきなのは自由に決意した人間であるのに？

罪とは、実体のない理論ではありません。罪の結果はそれとわかるものです。皆さんが私に説明を求める悪の問題の根底には罪があり、神の教えに従って生きることへの拒絶があります。これがその人の存在を傷つけ、善をはねつけることにつながります。こうして私たちは嫉妬や羨望、利己主義のとりこになり、やがては孤独に陥り人生の意味を見失ってしまうことを悟ろうとしません。

それにも関わらず、神の愛は欠けることがないと皆さんは確信していることでしょう。神ご自身が苦しみと死を私たちと一緒に分かち合おうと望まれたからです。四旬節と聖週間の間、このことを胸に留めておかなければなりません。神が経験された全てのことは、救われ、贖われたのです。使徒パウロが確信をもって強調するように、悪も愛の力に打ち負かされます。「だれがキリストの愛から私たちを引き離すことができましょう。艱難か、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。しかしこれらすべてのことにおいて、私たちは、私たちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」(ローマ8・35、37)ですから、これこそ悪に打ち勝つ道、イエス・キリストにおいてご自身をお示しになった御父の愛のうちに成長するための道です。

## 第二の質問

「教皇さまのメッセージには、痛悔して、たびたび赦しの秘跡にあずかるようにとの強い勧めがあります。お尋ねしますが、このような改心への願いはどこから

生まれるべきでしょうか？痛悔しなさいとはよく言われますが、その必要など感じないことがよくあります。なぜなのでしょう？さらにお尋ねたいのは、赦しの秘跡の言葉についてです。私たちが罪によってさまよい離れた御父のもとへ戻るための根拠になるとは思えない時があるのですが…。」

今日、一般に改心の必要を以前ほど感じなくなっているのは事実です。しかし実際のところ、成熟した人格を備えた大人になるための基盤として、自らに問いかけることが必要なのです。絶えず改心し、新しい人になり続けなければ、自分を知り、意志を統御し、悪を避けて善を行なうことは非常に難しいでしょう。

このように、人生というのは絶えず変わるものです。皆さんにも経験がおありでしょう。誰かを愛すれば、その人の愛を得るためにどんなことでもするではありませんか？時には、以前にはできるとは思いもしなかったような言葉や行動の変化だってあり得るではありませんか？もしそれが愛に根ざした行為でなかったなら、変わらなければなどと考えはしないはずで

特に赦しの秘跡の結果として、霊的生活にも同じことが起こります。赦しの秘跡とはこのように考えるべきものです。それはあらゆる人に及ぶ神の憐れみの効果的なしるし、子供が家を飛びだし財産を使い果たしてしまっても、帰ってくれば腕を広げ喜んで出迎えて、全てを一からやり直させようとする父親の愛のしるしなのです。告解の時、私たちは神の愛をじかに体験します。神はご自分にふさわしい、赦しの言葉と憐れみという方法で私たちを差し伸べておられます。

とは言え、改心への道は容易であると言うつもりではありません。過ちを認めるのがどんなに難しいかは誰もが知っています。実際、すなおに認めるどころか山ほどの言い訳を用意するのが私たちです。しかしそれでは、私たちを変え、手に入れるのが不可能と思えることを目指すようにする神の恩寵と愛を経験することはできません。神の恩寵がなければ、どうやって内なる自分を見つめ、改心の必要を理解することができましよう？私たちの心を変え、身近で確かなものとして神の愛を感じさせてくれるのは恩寵に他なりません。

忘れないでください。赦してもらった経験がなければ、他人を赦すことはできません。こうして告解は、キリストの憐れみ、教会の赦し、兄弟たちとの和解を経験することによってまことの自由に向かう王道となります。(第三の質問以降は次回)

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

「教皇様の声」では、スペインの週刊紙「アセプレンサ」に掲載された回勅の要約を訳して、何度か読者にお届けしたことがありました。同紙の記事の中から興味深いものを訳して希望者に提供してみたところ、「教皇様の声」の読者にも何らかのかたちで提供することはできないかという声が多くなってきました。そこで時々、できるだけ今日的な内容のものを選び、〈付録〉の形でいくつかの記事をお送りすることにしています。本文の教皇様ご自身のお話とともにご一読いただければ幸いです。御意見がありましたらどうぞお寄せ下さい。

（編集部）

## ヨハネ・パウロ二世 その魅力

教皇は多くのマスコミ関係者よりも社会をより良く理解しているのではないかな？

カロール・ボイティワ（ヨハネ・パウロ二世）は1978年に教皇に選出されてから、無数の批判者を苛立たせ、困惑させてきた。先日パリで行なわれた第12回世界青年大会の成功は、これまでの多くの例の中でも記憶に新しい。

（…）教皇は、教会を討論クラブのように考えたりしない。躊躇なく自分の権威がどこから来ているかははっきりと示す。『要理教育に関する使徒的勧告』の中で「あらゆる要理教育は、『私の教えは私のものではなく、私をお遣わしになった御方のものである』という神秘的な言葉を自分に当てはめねばならない」と言っているように。

（…）私（記者）はカトリック信者ではなく、神を信じる者ですらないが、教皇は大部分のマスコミの先生方よりももっとよく現代人を動かすことができると思う。その証拠に教皇は100万人の青年を集めた。

マスコミは意識してと言うよりむしろ慣習的に、教皇の訪問を重大視しないよう努めた。テレビは宗教色のない若者にインタビューをした。若者たちは口をそろえて、教皇を見に行っただのは環境問題や社会正義の問題に興味があったからだと言った。

こうした現代の問題も、教皇のメッセージの一部を占める。しばしば貧しい人々について言及し、「疎外された人々」のような言葉さえ使って信者に自分たちの義務を思い起こさせる。パリでは、チェルノブイリ2000という自転車マラソンの参加者に向かって話したが、その口調は世俗のレベルを超えていた。「この夏の休暇が、あなたたちにとって霊的な更新の時になるように。」霊的なテーマを理解する繊細さに欠けた

注釈者たちは、自分たちのよく知っている言葉で教皇の魅力の説明しようとする。教皇には「カリスマ」があると云ったり、スターになる素質があると云ったりする。CNNは、教皇がフランスで大勢の聴衆を引きつけたのは、つまるところ司祭になる前に役者であったからだだと結論した。

カロール・ボイティワに演劇の経験があることは確かである。ナチの占領下のポーランドで神学校の学生であったころ、地下の演劇クラブに属して活動していた。しかし、2000年を間近にしたカトリック教会における彼の役に思いを馳せる時、チャーチルのあの言葉を思い出す。「何という役者、何という劇。」

（カナダ・モントリオールのThe Gazette紙の記事より）

## 偏見なしの進化論

「教会によるダーウィンの復権」「ローマ、ついに進化論を認める」…これらはヨハネ・パウロ二世が進化論と創造の間に矛盾はないと確認した、先日の教皇庁科学アカデミーにあてたメッセージについて世界のメディアに現われた見出しである。これらのコメントを読むと、カトリック教会はアダムとイブを捨ててダーウィンと自然淘汰を取らざるを得なくなったかのような印象を受ける。頑迷な教会もついに科学の明らかな結論を前にして脱帽せざるを得なかった、と。

しかし、創世の書の記述を文字通りにとって、それがいかに神がこの宇宙を創造したかを描いていると主張するプロテスタントの原理主義者たちとは異なり、カトリック教会は聖書の記述からこの世界の起源についての科学的な真理ではなく、宗教的な教えを読み取るうとしてきた。

最初、ダーウィン説はカトリック信者の間にも同時代の人々と同じような困惑を引き起こした。しかし、教会は進化論の是非の判断を科学に一任した。「科学の

進歩のためのアメリカ協会」の会長フランシスコ・アヤラは、その著書「進化論の理論」(1994年)の中でそのことを証明する。彼はダーウインの理論が宗教界に受け入れられた経緯を説明し、「ダーウインの理論に対し、同時代のカトリックの神学者の中には、支持者も反対者も現われた。しかし20世紀に入ると、生物進化の理論は徐々に大多数のキリスト教徒の学者に受け入れられていった。」

教会の文書の中で最もはっきり進化論に言及したのは、1950年にピオ十二世が出した回勅『ウマニ・ジェネリス』である。これは、今回ヨハネ・パウロ二世が思い起こさせた文書であるが、その中でピオ十二世は、人間の靈魂が神から直接に造られたものであることを認めるならば、人の肉体の起源をすでに存在した生物に探ることはなんら信仰に反しないとした。そして、科学の手法に大いに敬意を表しつつ、進化論の賛成者と反対者に対して「慎重に、公平に、控えめに賛成または反対の理由を検討するよう」求めている。ピオ十二世にとって、進化論は完全に証明された理論ではなく、考察に値する仮説であった。

それから半世紀が過ぎた今、ヨハネ・パウロ二世は進化論が「単なる仮説以上のもの」と言うに至った。進化がどのように起こったかについてはまだ多くの疑問が残されているが、この50年間に進化について数多くの発見があった。教皇が指摘するように、これらの研究の収束は、「それ自体がこの理論を裏付ける重要な論拠となった」教会がこの問題に興味を持つのは、人間とは何かという問いに大いに関係があるからである、と教皇は続ける。それゆえ、キリスト教と種々の進化論が両立するかどうかを問題にするのは、科学的データを扱う学者ではなく、人の起源を物質にのみ帰する哲学者である。「そのような哲学から示唆を受けた結果として、精神を生物体の力から出るものとしたり、生物体の付随現象だとするような進化論は、人間についての真理と相容れない」とヨハネ・パウロ二世は注意を促した。

進化論に関する教会の教えについて、ヨハネ・パウロ二世が大きく方向転換したと考える人は、少なくともそれが十数年前に起こったことを認めなければならない。すでに1985年、ローマで開かれた「キリスト教の信仰と進化論」と題する国際学会の参加者に向けた話の中で、進化論の説明が科学の領域に止まっているかぎり、両者の両立を妨げるものは何もない、と教皇は語っている。「創造についての信仰を正しく理解すれば、また進化論を正確に教えるならば、この二つの間に障害はない。事実、進化は創造を前提とする。他方、進化の立場から見れば、創造は時間に沿って続けられる絶えざる創造として考えられ、その中で神は信仰者の目には天と地の創造主として現われる。」

これらの教えは、創造についてのカトリックの教えを知る者にとってはかなり初歩的なことである。つまり、今回の教皇の発言に驚きを感じる者は、ただ宗教に関する自分の知識が化石化していることを表わすに過ぎない。ある人々は教会が近代の進歩に適応する能力がないと言って教会を批判するが、実は彼ら自身が信仰と科学は対立するものだという古い考えにこだわっているのである。結局、最も進化しないのはこれらの偏見のようだ。

(「アセプレンサ」、1996年11月6日号から)

## インドの カトリック教会

マザー・テレサの帰天によって、インドの教会が注目を浴び、教会は人数的には少数派であっても、大きな影響力を持つことが明らかになった。

インドのカトリック信者は1,570万人で、全人口(9億1,800万人)のわずか1.8パーセントに過ぎない。その分布を見ると、南部と北東部の州に集中している。全人口の大部分はヒンズー教(83パーセント)とイスラム教(11パーセント)である。

キリスト教徒の大部分はダリーという最下層の身分の人々である。ダリーの割合が8~9割を占める教区も若干ある。しかし、キリスト教徒のダリーはインド古来の宗教に属していないという理由で、憲法がヒンズー教、シーク教、仏教のダリーには保証している特典を持たない。つまり、ダリーの誰かがキリスト教に改宗し、そのように届け出ると、自動的に政府の補助を失うのである。

現在インドのカトリック教会には三つの典礼、すなわちローマ典礼、シロ・マラバル典礼、そして1930年にローマ教会に入ったシロマラカル典礼がある。現在1万6千人の司祭(半数以上が教区司祭)、7万2千人の修道女、3千人の修道士(司祭ではない)が働いている。

インドではカトリック信者の数は少ないにも関わらず、カトリックの施設は教育や社会福祉の分野に広く浸透している。カトリックの教育施設(小学校から大学まで)では5百万人以上の生徒が勉強しており、その大部分はカトリック信者ではない。その他1万3千以上の福祉施設があり、その中には病院、診療所、ハンセン氏病病院、老人や障害者のための施設、孤児の施設、幼稚園、結婚相談所などがある。

(「アセプレンサ」、1997年4月17日号から)